

ホタルが照らす里 ―中畑町によみがえったかがやき―

それは、おとぎの国の出来事のようにでした。夜のとぼりがおりるころ、辺り一面に、ほのかな光がうかび上がってきました。一つ二つ、三つ四つと、その光が糸を引くようにゆれ動きます。暗くなった空に星がかがやき始めるころ、地上のその光の数も次第に増えてきました。

やみの中でやわらかい光が作り出す自然のショーを、たくさんの人が見守っていました。

今日は「中畑町ふるさとホタルまつり」の日です。台風の影響から立ち直り、昔のようにホタルが飛び交う自然豊かなふるさとにもどることを願って始まったこの祭りは、地域の復興のために力を合わせてきた人々の記念日でもありました。大勢の人の中に藤原さんの姿がありました。藤原さんは、ホタルの光に照らされた人々の笑顔を見ながら、あの大雨の日からの出来事を、思い起こしていました。

中畑町をこう雨がおそったのは、一九八三（昭和五十八）年九月のことでした。

台風十号のえいきょうで三日間激しい雨が降り続けました。すさまじい勢いで雨は降り、川の水かさが今までだれも経験したことのないほどに増してきました。山の谷間に白い筋が見え始めたと思っただ次のしゅん間、一気に水がおしよせ、家は水につかり、橋は川の流れにすみましました。

一面が海のようになり、町は水ぼつってしまったかのようでした。

台風が去り、晴れわたった空の下には、茶の間に土砂が入り河原のようになってしまった家や、ひび割れた道路、深くえぐられ、大きな岩が残されたままになっている田畑を、かたを落として見つめる人たちがいました。

のどかだった町の風景が一変してしまいました。

ホタルが飛び交っていたきれいな畑谷川も、無残な姿に変わりました。だれもがこの先、ホタルを再び見ることはないだろうと思いました。いや、ホタルのことなど考えている余裕はありませんでした。なにしろ人々の生活のきょ点である家々と田畑が、大きなひ害を受けたのです。自分たちの生活がどうなるのか、破かいされた家や道路、田畑をこれからどうすればよいのか、町の人たちは不安に包まれ、ただぼう然とするばかりでした。

当時、町の役員たちは、どのようにしたらこの大ひ害から町を立ち直らせることができるのか、そこに住んでいる自分たちに何ができるのかといったことを、何度も何度も話し合いました。この検討会に藤原さんも参加していました。

話し合いが始まってしばらくして、市役所から、ひ害を受けた田畑や川の修復と同時に、くずれた山すそを整備して工場公園をつくり、工場を建てたらどうかという提案がありました。

町の役員たちは、この提案について話し合いました。

工場公園の建設委員長になった井上さんをはじめ、区長さんや町役員たちは、説明会や相談があるたびに、安全で公害を出さない工場にきてもらうことが第一だと、市にお願いしました。やがて川や田畑が整備されました。曲がりくねっていたあぜ道がまっすぐになり、細かく分かれていた田畑は広く区画され、ひとまとまりに生まれ変わりました。また、田畑へ水を引くため

の水路も、水害にあってもくずれないように整備されました。

しかし、新しい川や水路は、ほとんどがコンクリートで固められた姿に変わっていました。

「田や畑が広くなって、米や野菜が作りやすくなり、川も安全になったのはうれしいが、何かもの足りないように思うのは、私だけだろうか……。」

藤原さんは、どうしても昔の自然豊かな中畑町を忘れることができませんでした。

ある日、このことを思い切って町の役員会で話してみました。

すると、みんなだまってうなずきました。藤原さんと同じ考えをもっていたのです。

それどころか、すでに行動を起こしている人がいたのです。

井上さんでした。井上さんは、以前から大根や玉ねぎなどの具がいっぱい入ったみそしるをつくって布ぶくろに入れ、それをコンクリートにおおわれた川に少しずつ続けていたのです。藤原さんは納得しました。それは、ホタルが育つためになくてはならないカワニナのえさなのです。井上さんはホタルが飛び交う日を夢見て、ずっとその作業を続けていたのです。井上さんの思いをよく知っていた山本さんが、藤原さんにそのことを話してくれました。

藤原さんは勇気がわいてきました。

「ホタルを呼びもどそうや。わしらの力で。わしらの生活だけじゃなく、ホタルが暮らすことのできる自然をこの町に取りもどそうやないか。」

藤原さんは呼びかけました。

「そや！水害でしずんだ気持ち、ホタルの光で明るく照らそうや。」

と、みんなが賛成しました。

それから役員の人たちは、ホタルをもう一度中畑の町に飛ばそうと、さまざまな活動を始めました。ホタルを大切に育てている地域に見学に出かけて参考にしたり、育て方を学んだり、自分たちで幼虫の飼育に取り組んだりしました。そして、工場公園の水路や畑谷川に、育てたホタルの幼虫やカワニナを放流しました。

同時に、町にやってきた工場には、よごれた水を流さないことや、美しい自然を守る活動に協力してもらえるようお願いをしました。

そのような活動が始まってから数年が経った、五月終わりのある日の夕方でした。田植えが終わった田の水の見回りに出かけた井上さんは、工場公園の水路の近くで、黄色くかがやく光を見つけたのです。

「あっ！」

井上さんは、そのまま藤原さんの家にとんでいきました。

「おったで、おったで、ホタルが飛んどるで。」

興奮した井上さんの言葉を聞かやいなや、藤原さんは家をとび出しました。

山本さんたちもやってきました。

確かに黄色い光が、わずかながらゆらゆらと水面にゆれていました。

藤原さんたちは、その光を目で追いながら、こみ上げてくる思いに、言葉が出ませんでした。このホタルの再来は、藤原さんたち役員だけではなく、町の人たちを元気づけました。昔のようにホタルが町にもどってきたのです。これをきっかけに、美しい自然と人々のつながりを大切

にしよう、という思いをこめた「ふるさとホタルまつり」を開くことを決めました。市や工場にも協力してもらい、一九八九（平成元）年、あのごろ雨から、六年が経った六月に、第一回の「ふるさとホタルまつり」が開きされました。

藤原さんたちをはじめ、ホタルが生きていくことができる自然を取りもどすために努力した人々や、それに協力してくれた町の人たちの笑顔があふれていました。

「これからもこの町の美しい自然を大事にしていこう。」
と、この日、みんなでちかい合ったのです。

あれから二十年以上のさい月が流れました。今日の「ふるさとホタルまつり」にも子供たちの元気な声がひびいています。

「この子たちが大人になっても……。」

藤原さんは、一つ、また一つ、糸を引いてゆれるやわらかな光をながめていました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。